

どんな健康リスクがあるのか、どのように子供に健康リスクを教えるのか？(第4班)

伊藤博夫，岡部信彦，黒川修行，高橋浩之，中村安秀
(あいうえお順)

1. どのような健康リスクがあるのか？

インフルエンザやHIV/AIDSなどの感染症，交友関係，スマホ，インターネットやICT社会などのネットワーク環境，歯肉炎，肥満や痩身など生活習慣に関わることなど，具体的な「リスク」と考えられる事柄が多数挙げられた。そのような中で，そもそも子供たちが「リスク」として認識する力が不足しているのではないかという，指摘があった。すなわち，ある事象が「危険因子」なのか，そうではないのか，を認知する力がないことが「リスク」なのではないかということである。そこで，本班では，このことに焦点を絞り，議論を進めた。

2. どのように子供に健康リスクを教えるのか？

「リスク」それ自体を子供に教えるためには，どのような展開が必要となるのか，検討した。そもそも，近年の子供達についてみると，依然として「健康リスク」は存在しているものの，データ(数値)としては減少している。このことはこれまでの医療や保健活動，あるいはそれらの環境がもたらした結果であると考えられた。しかし，このような環境で育ってしまったが故に子供達は「リスク」を察知することが難しくなってしまったのかもしれない。そこで，「リスク」という「考え方」を子供達に伝える必要があるだろう。子供達は成長過程にあることから，その過程において，「リスク」は変化するだろう。従って，その時々タイミングで教示しなくてはならないだろう。また，子供に教えるのであれば，その場は「学校」が適切であると思われる。しかしながら，現在「リスク」の考え方は学校ではほとんど触れることがない。従って，それらをサポートする必要もある。文部科学省や厚生労働省などの各省庁や関連学会等からの支えがなければ，学校だけでは対応が難しいだろう。学校の教員自身もリスクに対する認識が高いとは言えないだろう。「健康リスク」は危険であるのかどうか，すなわち「正解」「不正解」という二者択一的なものではなく，「幅」というものが存在しているとも言えるからである。また，保護者や教員など，大人だけでは無く，子供自身からの参画も必要なのでは無かろうか。リスク認知が乏しくなってきた要因としては，大人達が「リスクにあたらぬように場を設定してきた」からであるとも考えられる。リスクを教える際には「リスク」を振り払う，切り分ける作業も含まれることになると思われるが，子供の視点も必要であろう。子供自身がリスクを考えることにより，リスクを察知する能力を高めることも期待できるだろう。健康リスクにOwn Responsibilityで対応し，現在目前にあるリスクを理解するとともに，遠い将来の安定を図るために，子供達が「リスク」について学ぶ機会の必要性が重要であると考えられた。